長崎県文化財調査報告書　第157集

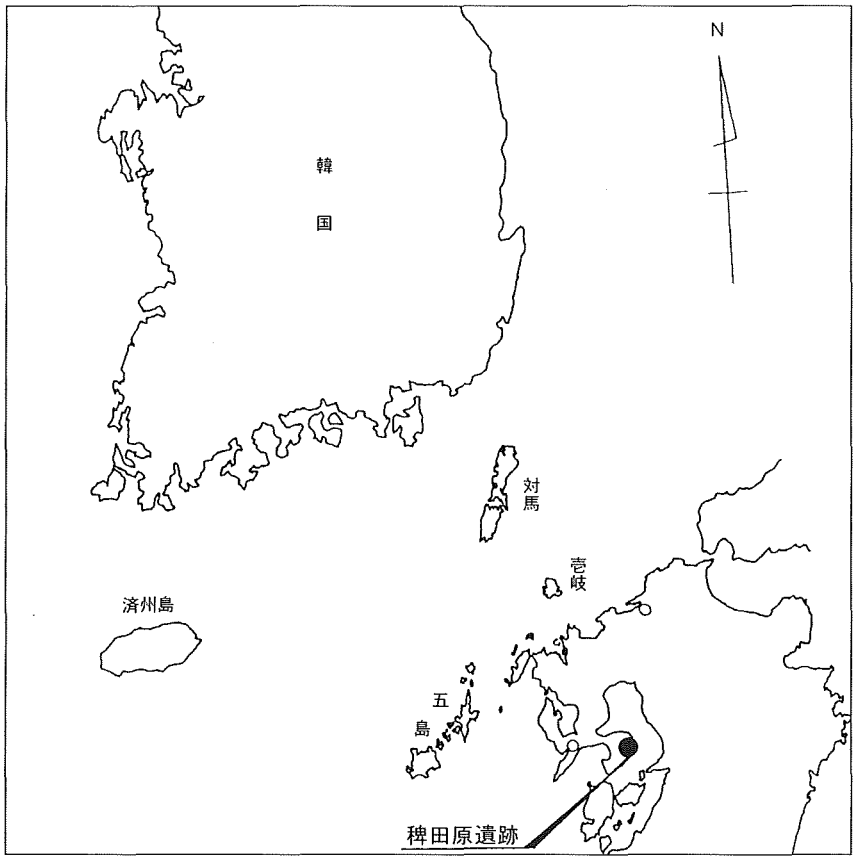
稗田原遺跡Ⅳ

2000年

長崎県教育委員会

長崎県文化財調査報告書　第157集

稗田原遺跡Ⅳ



2000年

長崎県教育委員会

旧河道・土層検出状況

旧河道・土師器出土状況

発刊にあたって

稗田原遺跡は，島原市の北側に位置する稗田町にあります。付近には，縄文時代の大規模な遺跡である畑中遺跡や礫石原遺跡が点在しており，古くから歴史にゆかりのある地域でもあります。

今回の調査は，継続的に行われている県道の拡幅工事に先立って行われたものですが，縄文時代や奈良時代の遺物が出土しました。奈良時代の遺物は，土石流の跡から出土しており，この一帯が古くから雲仙・普賢岳の災害と対峙していたことを物語っています。

考古学は，ともすれば過去の出来事だけを考える学問と思われがちですが，災害の歴史を解き明かすことは，現代にも十分生かすことのできる情報を提供しているとも言えます。

今回の報告が，貴重な教訓として活用され，あわせて文化財保護の一助となることを念願し，発刊の御挨拶といたします。

平成12年３月

長崎県教育委員会教育長

木村　道夫

例　　言

1．本書は，一般県道野田島原線道路改良工事に伴って実施した，長崎県島原市稗田町に所在する稗田原遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．調査は，長崎県教育委員会が主体となり，長崎県教育庁文化課がこれを担当した。

3．調査期日と担当者は，以下のとおりである。

試掘調査（平成10年７月11日～平成10年７月14日）

長崎県教育庁文化課　文化財保護主事　川口　洋平

文化財調査員　　尾上　博一

本調査（平成11年２月22日～平成11年３月９日）

長崎県教育庁文化課　文化財保護主事　川口　洋平

同　　小松　旭（現北陽台高校）

4．本書の執筆・編集は川口による。

本　文　目　次

Ⅰ．遺跡の地理的歴史的環境 …… （1）
Ⅱ．調査経緯 …… （3）
Ⅲ．調査 …… （4）
　1．試掘調査 …… （4）
　2．本調査 …… （7）
　　（考察1） …… (13)
　　（考察2） …… (14)
Ⅳ．まとめ …… (16)
図版 …… (17)

挿　図　目　次

第1図 遺跡位置図 …… （2）
第2図 県道拡幅範囲図 …… （3）
第3図 試掘坑配置図 …… （5）
第4図 試掘土層図 …… (14)
第5図 調査区域配置図 …… （8）
第6図 本調査土層図 …… （9）
第7図 縄文時代の遺物 …… (10)
第8図 歴史時代の遺物 …… (12)

図　版　目　次

図版1 遺跡遠景 …… (19)
図版2 調査風景１・２・３ …… (20)
図版3 旧河道１・２・３ …… (21)
図版4 22区・22区東壁（１）・22区東壁（２） …… (22)
図版5 21区旧河道土層・土師器出土状況（１）・土師器出土状況（２） …… (23)
図版6 縄文土器出土分布・土師器９・土師器10 …… (24)
図版7 土師器11・土師器12・灯明皿22 …… (25)
図版8 歴史時代の遺物①（外） …… (26)
図版9 歴史時代の遺物①（内） …… (27)
図版10 歴史時代の遺物②（外） …… (28)
図版11 歴史時代の遺物②（内） …… (29)
図版12 縄文土器 …… (30)

Ⅰ　遺跡の地理的歴史的環境

稗田原遺跡の所在する島原半島は、長崎県南東部の雲仙火山を中心にひろがっている。半島は愛野地峡で肥前半島に繋がり、東西約17km、南北約31km、面積463平方kmである。地質・地形的には北部の雲仙火山地域と南部の南島原火山地域に大別でき、小浜町飛子から北有馬町の原山、有馬川河口の谷川に至る線が境界となる。雲仙火山は大分県姫島・九重、長崎県多良岳、対岸の熊本県金峰山とともに属する大山火山帯の一部で、九州中部を東北東から西南西に横断する別府、島原地溝帯の西端に位置する。その面積は半島全体の約70%を占める。この雲仙火山地域は半島のほぼ中央に位置する普賢岳を主峰とし、東の眉山、西の国見岳、九千部岳、北の吾妻岳、鉢巻山などにより構成される。主峰普賢岳の溶岩は粘性に富む角閃石安山岩である。

稗田原遺跡は、この島原半島の東側に位置する島原市の稗田町に所在している。遺跡の立地する同山系北東麓に伸びた火山性扇状台地は、基盤を雲仙基底火山砕屑層または竜石層と呼ばれる火山砕屑物で厚くおおわれており、緩やかに勾配して遺跡から約600ｍ東の有明海に没している。また周辺は、舞岳・普賢岳・眉山を水源とする河川群が狭小な沖積低地を構成している。遺跡は礫石原山麓地の末端南方で西川と中尾川により堆積した沖積低地上にあり、本調査区は東西約675ｍ、南北400ｍの遺跡範囲中、中央部南東寄り標高27～30ｍに位置する。北を東流する西川周辺には眉山の裾野にかけて縄文時代の遺跡が多く存在している。

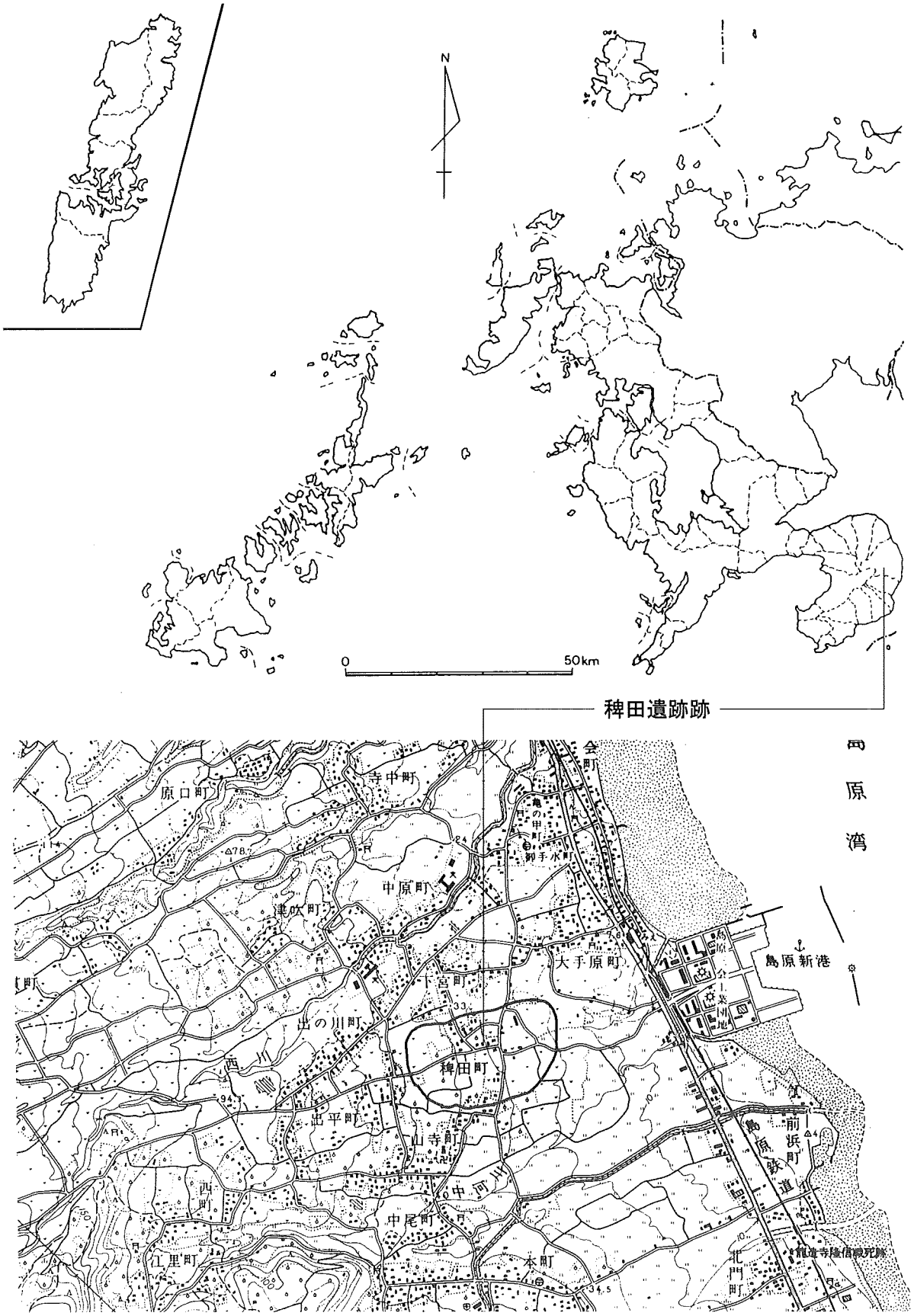
普賢岳の活動に関する文献記録はふたつ残されている。一つは明暦三年（1657)、異説では寛文三年（1663）に起きた、普賢岳北東方700ｍの鳩の穴からの噴火で、大量の古焼溶岩が北方の山麓に流出した。翌四年には九十九島池から火山活動に伴う温泉水の大量噴出があり、この出水により家屋流出と死者を出す惨事を引き起こしたという。また同時期に三会村の礫石原でも出水があったとされている。いま一つは寛政四年（1792）の噴火で、普賢岳北東方約１kmの飯洞岩の北方の地獄跡から新焼溶岩流が噴出し、穴追谷をおよそ３km流下した。この噴火に前後して眉山が崩壊をおこし、高度は150ｍも低くなり、海岸線は埋没のため800ｍ前進している。対岸の熊本県にも被害が及ぶ災害となり、島原大変として伝えられる。島原市の豊富で澄んだ水は眉山崩壊の堆積物から伏流水としてわき出したものである。

【引用参考文献】

長崎県編 1984「雲仙火山　地形・地質と火山現象」『雲仙の自然と歴史』（国立公園「雲仙」指定50周年記念）

倉沢　一 1992「第４章火山　３大山火山帯（４）雲仙火山」日本の地質『九州地方』編集委員会編『日本の地質９　九州地方』共立出版株式会社

太田一也・小林哲夫・露木利貞 1992「第６章応用地質　３災害地質（４）噴火災害」日本の地質『九州地方』編集委員会編 1992『日本の地質９　九州地方』共立出版株式会社


N
0
50km
稗田遺跡跡
島原湾
原口町
寺中町
中原町
津吹町
大手原町
下宮町
出の川町
稗田町
出平町
山寺町
中尾町
本町
江里町
西町
北門町
前浜町
島原新港
島原鉄道

第1図　道路位置図

Ⅱ　調査に至る経緯

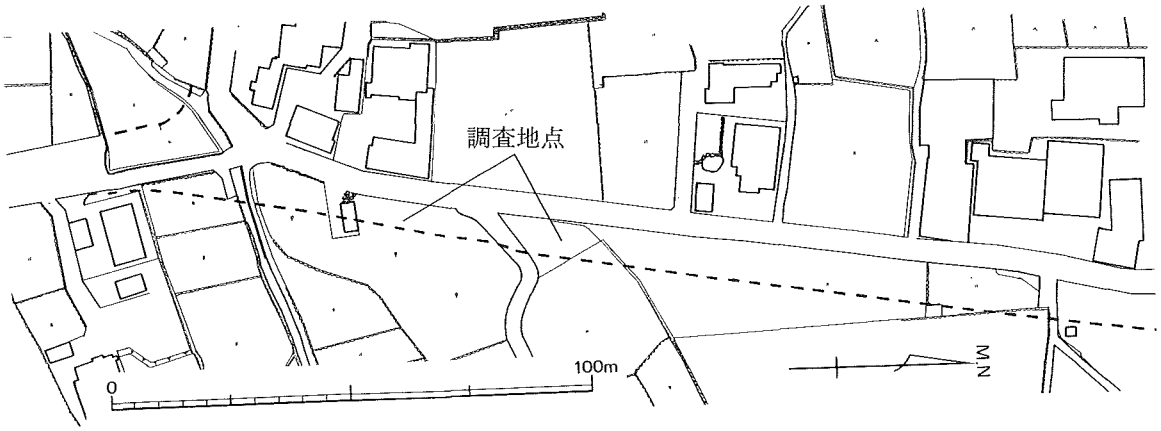
稗田原遺跡は，昭和56年の分布調査により周知され，県道の拡幅工事等に伴って長崎県教育委員会により断続的に発掘調査が行われている。

島原半島北部から島原市へつなぐ主要道として，海岸沿いの国道251号線と山間部の愛野島原線，その間を走る通称「雲仙グリーンロード」「中間道路」等と呼ばれる広域農道が存在する。

このうち近年開通した広域農道は三会地区までしか開発されておらず，以降市街地までは251号線もしくは離合困難な隘路を通る必要がある。この道路事情改善のため，広域農道と直交する礫石原・松尾停車場線道路，さらにそれと直交する野田島原線道路の改良拡幅工事を行い，それまで一車線だった両路線を二車線とし，広域農道から島原市本町町を結ぶ事業が島原振興局により計画された。両路線とも稗田原遺跡の範囲内を通るため，島原振興局と協議を行い，発掘調査を行うこととなった。

すでに平成10年度には，用地買収の終了した約1,340㎡について調査を実施したが，その際に未買収の南側の延長部分の試掘を行った。その結果，遺物包含層が確認された220㎡について本調査を実施することとなった。

番号	調査期間	事業名	調査主体
1	平成4年8月～9月	県道拡幅に伴う緊急発掘調査	長崎県教育委員会
2	平成4年11月4日～11月6日	新農政稗田地区灌漑排水整備事業に伴う範囲確認調査	長崎県教育委員会
3	平成5年1月18日～1月22日	新農政稗田地区灌漑排水整備事業に伴う緊急発掘調査	長崎県教育委員会
4	平成6年1月11日～1月14日	県営住宅建設に伴う緊急発掘調査	島原市教育委員会
5	平成7年10月16日～11月2日	一般県道礫石原石原・松尾停車場線道路改良工事に伴う緊急発掘調査	長崎県教育委員会
6	平成8年7月3日～7月12日	一般県道礫石原石原・松尾停車場線道路改良工事に伴う範囲確認調査	長崎県教育委員会
7	平成8年9月9日～11月1日	一般県道礫石原石原・松尾停車場線道路改良工事に伴う緊急発掘調査	長崎県教育委員会
8	平成9年3月7日～3月18日	一般県道礫石原石原・松尾停車場線道路改良工事に伴う緊急発掘調査	長崎県教育委員会
9	平成9年12月1日～12月5日	一般県道野田島原線道路改良工事に伴う範囲確認調査	長崎県教育委員会
10	平成10年5月13日～7月10日	一般県道野田島原線道路改良工事に伴う緊急発掘調査	長崎県教育委員会



第2図　工事区域図

Ⅲ　調　査

１．試掘

（１）調査方法

調査は，平成10年７月11日～７月14日に実施した。工事予定区域に２ｍ×２ｍの試掘壙を３箇所設定し，それぞれＴＰ１～３とした。掘り下げは人力で行い，遺物包含層については，精査を行った。

（２）土層

［ＴＰ１］

第１層　表土（みかん耕作土）黒褐色土でフカフカとしている。

第２層　作土　黒褐色の客土でフカフカとしている。

第３層　やや赤みをおびた火山灰土で上部にＦｅが沈殿している（アカホヤか）。

第４層　黒褐色土層（パミス，礫を含むいわゆるカシノミ層）

第５層　黄茶褐色基盤層

［ＴＰ２］

第１層　表土（みかん耕作土，黒褐色土）

第２層　作土（ｂ・ｃは色調違うが，みかんの根による攪乱）

第３層　ａ．赤みをおびた火山灰土（アカホヤか）

ｂ．同上で，縄文土器を包含している

第４層　ａ．黒褐色土層（パミス，礫を含むカシノミ層）

ｂ．砂礫層

第５層　暗緑灰色砂礫層

［ＴＰ３］

第１層　表土（黒灰色）

第２層　ａ．暗白灰色火山灰層（平成の普賢岳噴火による）

ｂ．旧作土（黒灰色）

第３層　ａ．黄褐色砂礫層（土石流，上部Ｆｅ沈殿）

ｂ．火山灰層（流れ込み）　　古代～中世の遺物（流れ込み）

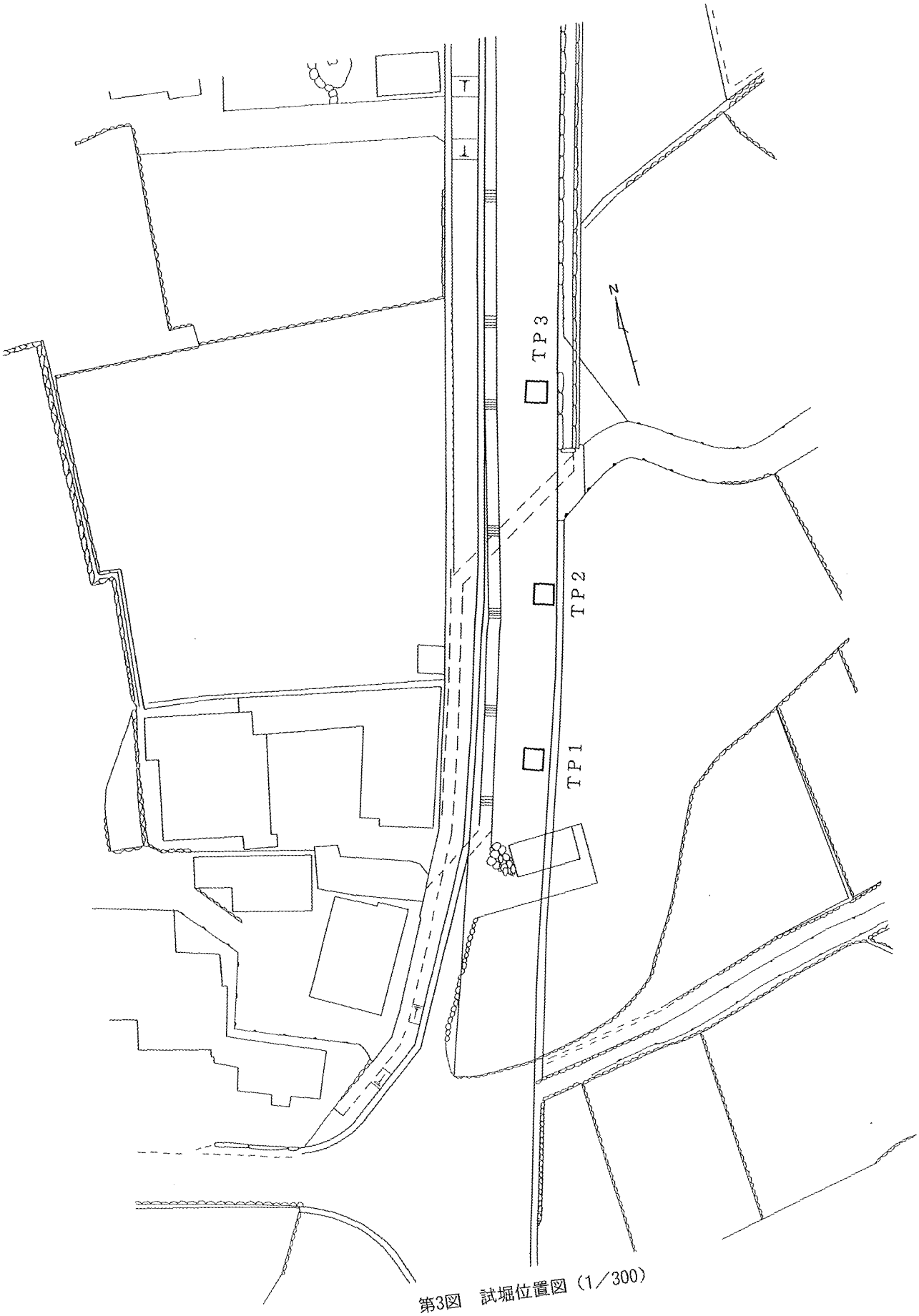
ｃ．砂礫層（土石流）

第４層　黒灰色土層（パミス含むカシノミ層）

第５層　暗褐色基盤層

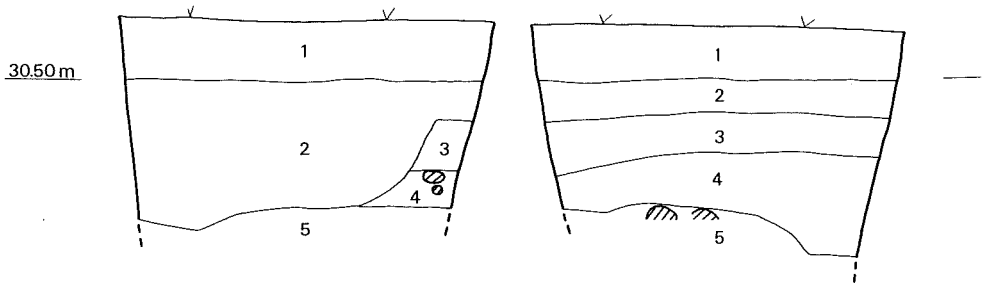
（３）まとめ

調査の結果，ＴＰ２・３において遺物包含層が確認された。遺構は確認されなかったが，ＴＰ３の土石流の堆積は，平成10年度の調査で確認された旧河道の延長部と考えられる。以上の結果から，ＴＰ２・３の前後，220㎡については，本調査が必要と判断される。

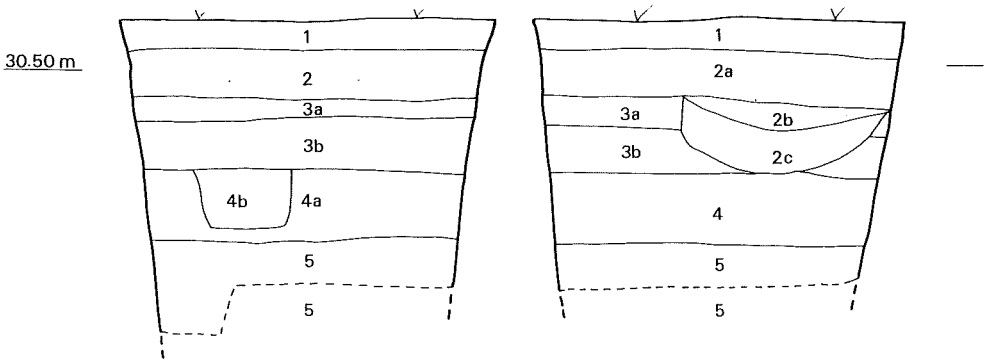


第3図　試堀位置図（1／300）

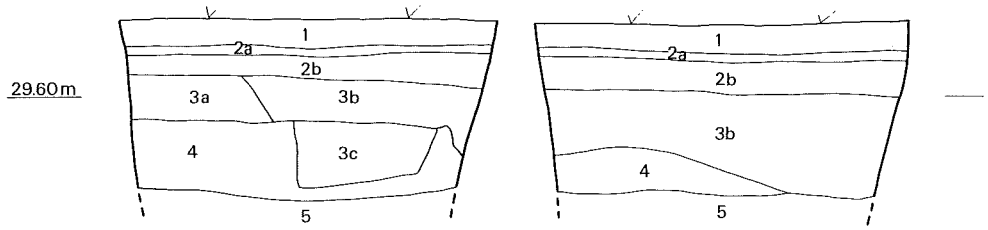
TP1



TP2



TP3



第4図　試堀土層図（1／40）

２．本調査

（１）調査方法

今回の調査区は，昨年実施した調査区の南側に延長した部分にあたる。昨年の調査では，県道礫石原松尾停車場線との交差点から南側へ，10ｍ×10ｍのグリッドを１～20まで設定していた。今回は，このグリッドを延長することとしたが，調査区が不定形なため，調査区北側を21区，南側を22区とした。調査前の状況は，21区は水田，22区はみかん畑であった。掘り下げは，表土をバックフォーにより行い，以下を人力で行った。遺物包含層については精査を実施した。

（２）土層

調査の結果，調査グリッドの21・22区では，大きな土層の違いが認められた。以下に，それぞれの層序を記す。

[21区]

第１層　ａ．暗灰色土（水田作土）下部に普賢岳の平成噴火の火山灰が堆積

　　ｂ．同上（ややしまる）

第２層　やや赤みを帯びた暗茶褐色土（水田の床土でＦｅ沈殿，攪乱の遺物あり）

第３層　ａ．黄灰色砂礫層　遺物含むがローリングが著しい（遺物は，古代が主体）

　　ｂ．灰色砂層

第４層　黒灰色土（カシノミ層）

[22区]

第１層　暗灰色土（みかん耕作土）

第２層　黄橙色砂質層（Ｆｅ沈殿）

第３層　ａ．黄褐色土（フカフカした火山灰土，アカホヤか）

　　ｂ．同上（やや茶色みがかる）

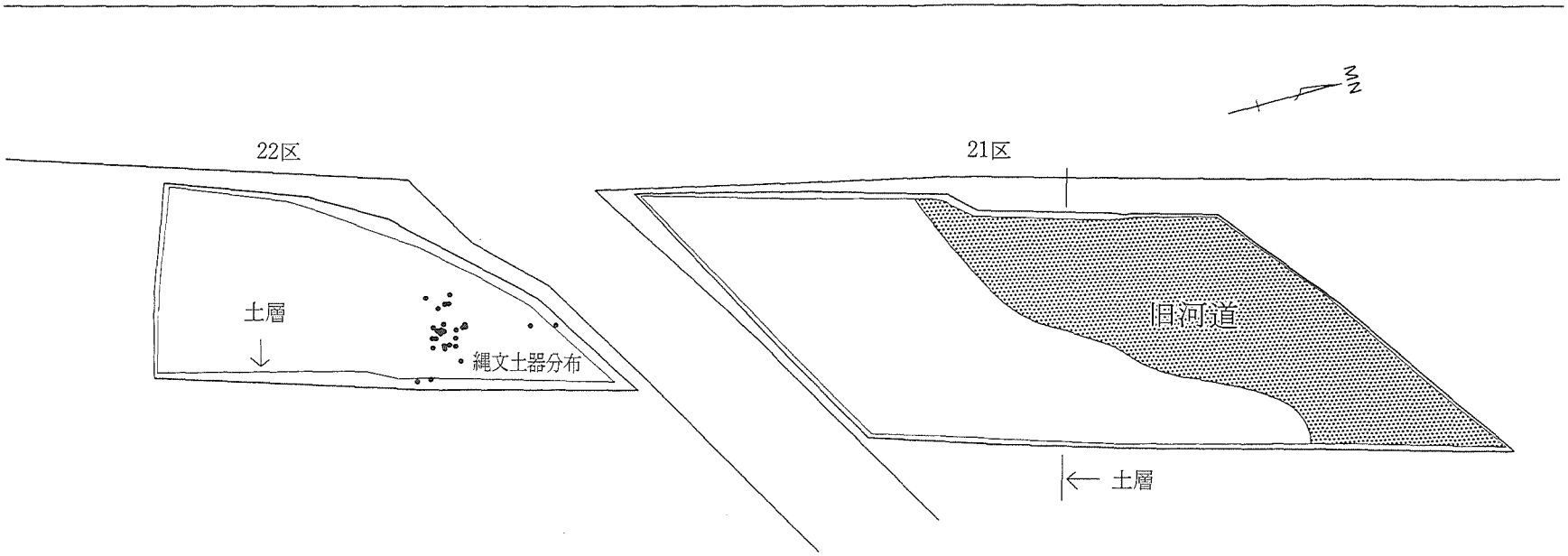
　　ｃ．明るい黄白色の火山灰土（縄文土器含む）　　50㎝大の石を多く含む

　　ｄ．黒灰色火山灰土

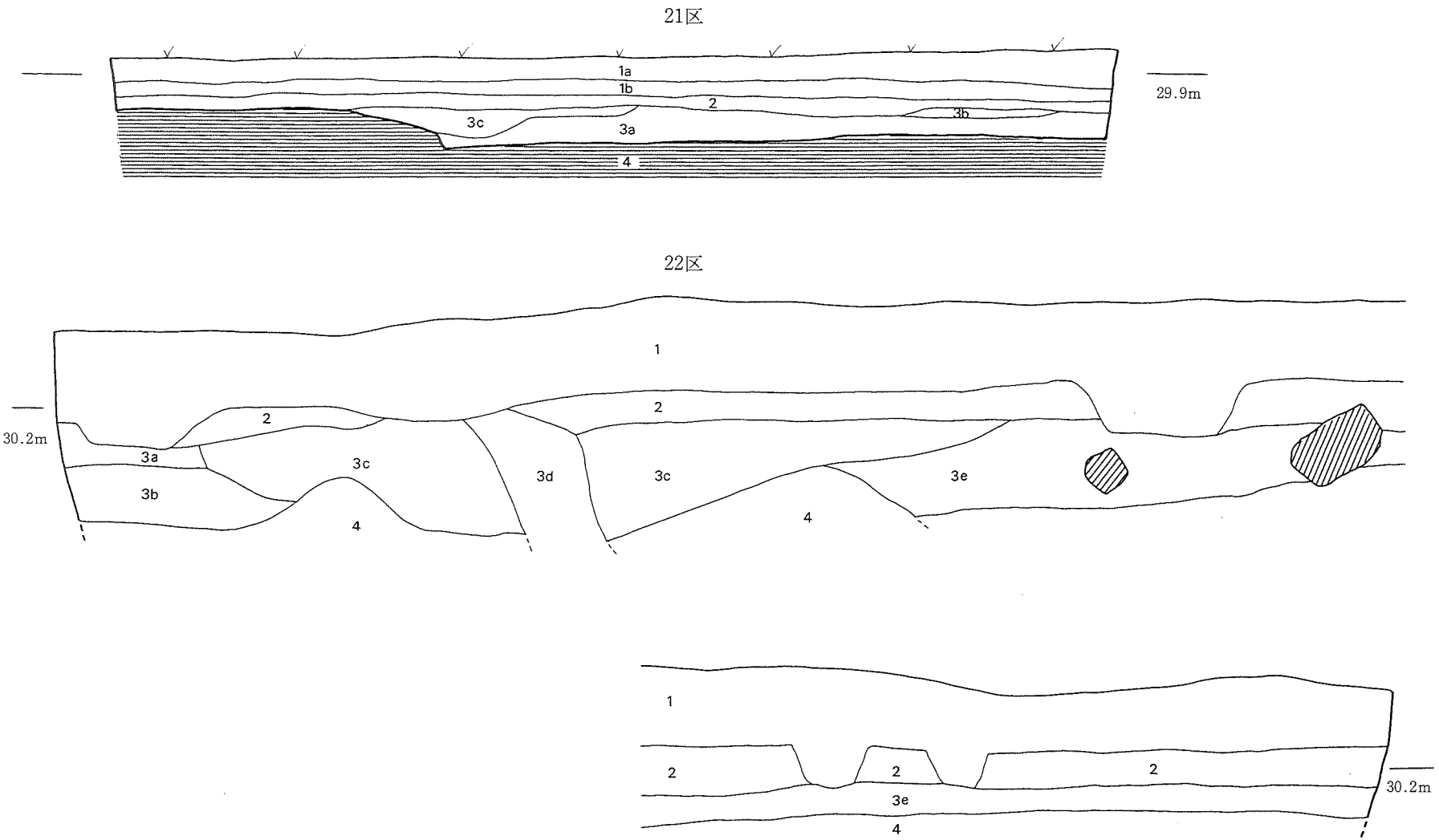
　　ｅ．黄灰色火山灰土

第４層　黒灰色土（カシノミ層）

21区では，22区にみられるフカフカとした黄灰色の火山灰層が確認されなかった。これは21区で確認された旧河道により，柔らかい火山灰層が浸食されたためであると考えられる。22区付近は，21区以北に比べて約１ｍほど標高が高くなっており，さらに南側の調査区外に現在の小川が流れていることから，三角州状の微高地となっている。22区の縄文時代の包含層は，激しい浸食から辛うじて残存したものであると考えられる。なお，21区南側は近代の攪乱により，河道自体が失われていた。また，今回の調査では，遺構は検出されなかった。



第5図　調査区域図（1／200）



第6図　本調査土層図（1／40）

（3）遺　物

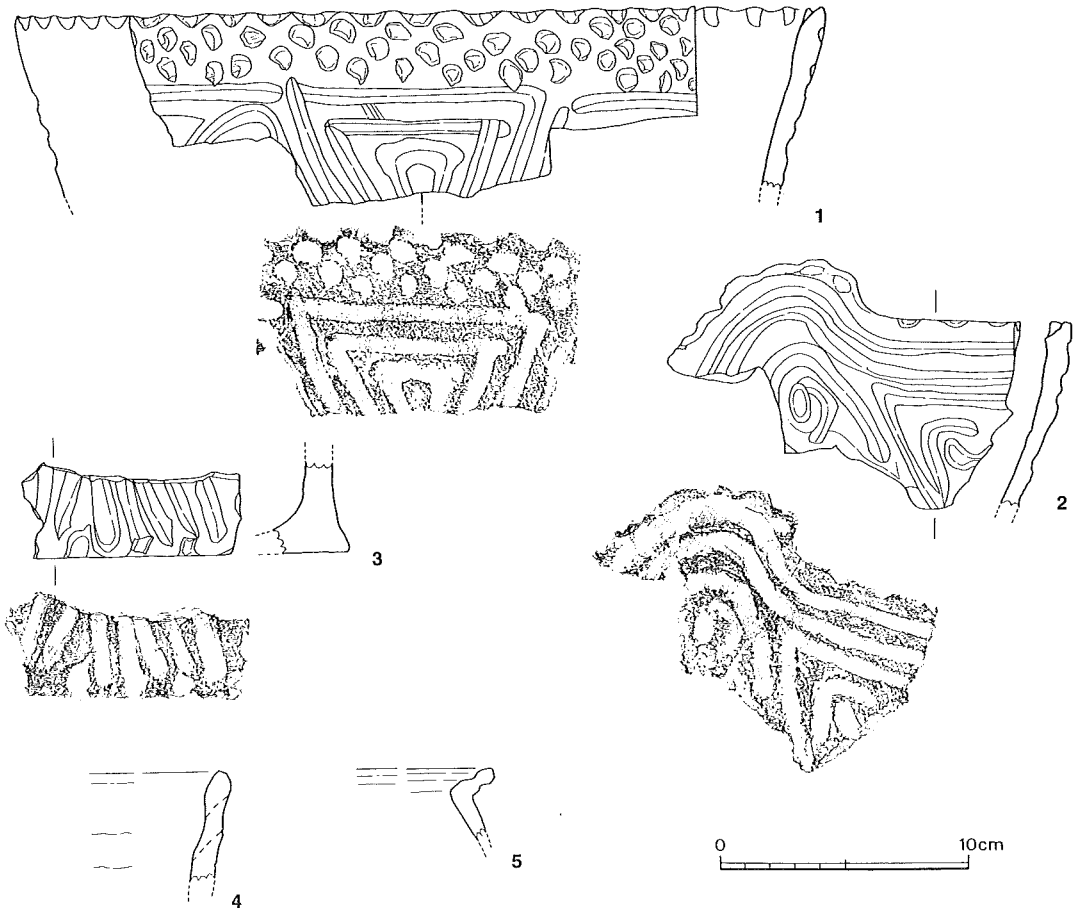
出土した遺物の総点数は約900点で，うち縄文土器が約40点でそれ以外は歴史時代の遺物である。

縄文時代の遺物（第６図）

縄文時代の土器は，40点が出土した。21区の旧河道から晩期の細片が２点出土しているほかは，すべて22区の３ｃ層から集中して出土した（第５図）。

１は，22区の３ｃ層から出土した。口唇部に棒状の原体で波状に凹文を施し，口縁外周に豆粒大の凹点文を連続して施す。棒状の原体の先を押し当てたと考えられる。胴部には，同様の原体により，三角形のモチーフを凹線で描く。２は，22区の３ｃ層から出土した。口唇部は，棒状の原体で波状の凹文を施し，一部で山形に盛り上がっている。口縁部外周から胴部にかけては，棒状の原体の先端により，丸と三角を組み合わせたモチーフを凹線で描く。３は，22区３ｃ層から出土した底部である。平底であるが，外面には，棒状の原体で凹線を描き，接地部外周に指で凹点文を施す。

１～３は，水ノ江和同氏より，坂ノ下式であるとの御教示をいただいた。また，同一個体である可能性も御指摘いただいた。４・５は，旧河道の３ａ層から出土した晩期の土器である。４は，粗製の土器で接合痕が明瞭に認められる。５は，くの字状口縁の黒色研磨土器で，古門雅高氏より晩期中葉との御指摘を受けた。なお，縄文土器に関しては，渡邊康行氏にも多くを御教示いただいた。



第6図　縄文時代の遺物（1／3）

歴史時代の遺物（第７図）

１は，越州窯系青磁碗で，21 区の旧河道内３ａ層から出土した。胎土精良で，光沢のあるオリーブグリーンの釉が全面施釉される。高台畳付けの釉はカキとられており，目跡がのこる。精製品で，土橋理子のいうＩＡ１類に相当する。２は，須恵器の甕で，21 区の旧河道内３ａ層から出土した。口縁部外周に二条の沈線が巡り，胴部内面に車輪文タタキがのこる。３は，須恵器の壺または瓶の底部で，21 区旧河道３ａ層から出土した。外面をヘラケズリしている。４は，須恵器の皿と考えられるが蓋の可能性もある。21 区２層から出土した。表面灰褐色を呈し，胎土精良で焼成良好である。５は，須恵器の杯蓋で，21 区旧河道内３ａ層から出土した。胎土黒灰色を呈し，焼成堅緻で外面に自然釉がかかる。身受けのかえりがつく。６は，須恵器の杯蓋で，21 区旧河道３ａ層から出土した。焼成やや甘く，器表が風化している。端部外周はカギ形に折れ，身受けのかえりはない。７・８は，須恵器の杯身で，共に 21 区旧河道３ａ層から出土した。断面角形の高台がつく。

９～12 は，旧河道でまとまって出土した土師器である。９は，皿で 21 区旧河道の３ｂ層から出土した。口径 11.0 cm，底径 5.0 cm，器高 2.2 cmで明赤褐色を呈する。焼成はふつうで，雲母を多く含む。底部はヘラによる切り離しである。10 は，皿で 21 区旧河道の３ｂ層から出土した。口径 10.2 cm，底径 5.4 cm，器高 2.1 cmで明赤褐色を呈する。焼成はふつうで，やはり雲母を多く含む。底部はヘラ切り離しである。11 は，皿で 21 区旧河道３ｂ層から出土した。口径 10.8 cm，底径 5.6 cm，器高 2.0 cmで，にぶい橙色を呈する。これも胎土に雲母を多く含む。底部はヘラ切り離しである。12 は，皿または杯で，口径 10.8 cm，底径 5.6 cm，器高 2.9 cmを測り，にぶい橙色を呈する。胎土に雲母を多く含む。13 は，高台付きの杯身で，21 区の２層から出土した。橙色を呈し，胎土に石英・長石を含む。14 も高台付きの杯身で，21 区の２層から出土した。明褐色を呈し，胎土に石英・長石を含む。

15・16 は，土師器の甕である。15 は，21 区の２層から出土した。明褐色を呈し，胎土に石英・長石・黒雲母を多く含む。焼成はやや甘く，内面にはケズリ，外面にはハケメがのこる。16 は，21 区の３ａ層から出土した。淡黄色を呈し，胎土に石英と黒雲母を多く含む。内面にはケズリがのこるが，外面は風化が進んでいる。

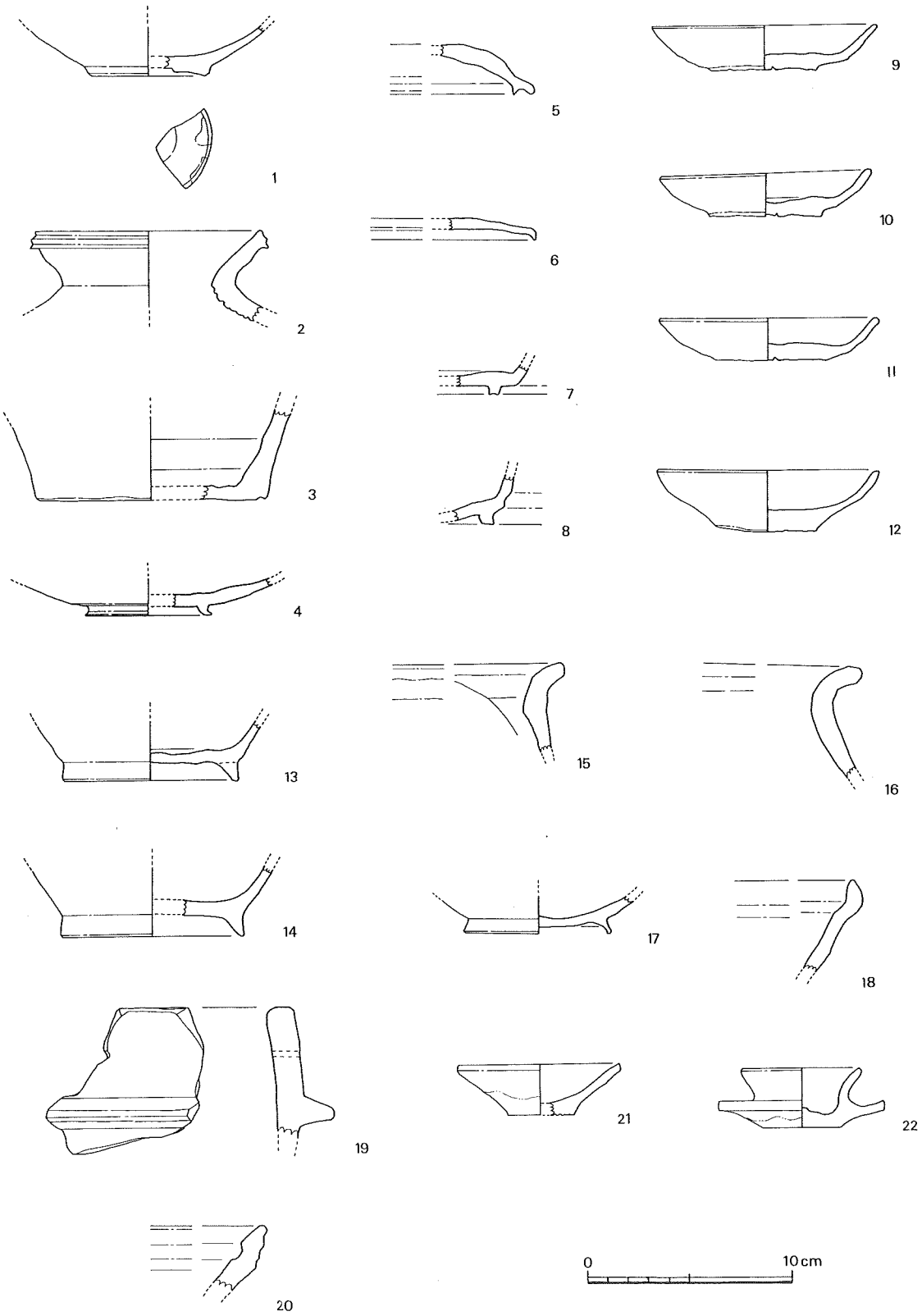
17 は，内面を黒色に燻した，いわゆる黒色土器Ａ類である。21 区旧河道内３ａ層から出土した。底部は丸く形成され，薄い高台がつく。胎土に石英・金雲母を含む。

18 は，東播系の須恵器で，21 区旧河道３ａ層から出土した。灰白色を呈し，口縁部が玉縁状に屈曲している。焼成は良好で，胎土に長石粒を含んでいる。

19 は，滑石製の石鍋で，21 区旧河道内３ａ層から出土した。口縁外周に鍔状の把手が巡る。端部把手と口縁端部の間に穿孔が認められる。ローリングによりノミ痕は認められない。

20 は，陶器の鉢で，21 区の２層から出土した。にぶい赤褐色を呈し，焼成は堅緻で，胎土に黒色粒を含む。産地は不明であるが，備前に似る。

21・22 は，唐津系の灯明皿である。22 は，21 区の２層から出土した。底部糸切りで，胎土は赤褐色を呈す。22 は，22 区の１層から出土した。底部糸切りで，胎土赤褐色。共に，鉄釉がかかる。



第7図　歴史時代の遺物（1／3）

（考察１）歴史時代の遺物について

稗田原遺跡から出土した歴史時代の遺物は，どのような出土傾向を示しているのであろうか。他遺跡との比較を中心に検討してみたい。

稗田原遺跡の旧河道から出土した歴史時代の遺物は，時期的にみると古墳時代の終わりから平安時代に及んでいる。しかし，量的にみるとその主体となる時期は，奈良時代から平安時代初め（八世紀～九世紀前半）頃であると考えられる。この時期以降や古墳時代の遺物は極端に少なく，土石流が流れた際に途中で紛れ込んだ可能性もある。今回は，旧河道の機能別にみた遺物組成を，ほぼ同時期の壱岐の串山ミルメ浦遺跡（宮崎 1990）と原の辻遺跡・大川地区（川口 1995），大宰府史跡（赤司 1989）のデータと比較してみた。

稗田原遺跡（旧河道）	煮沸具 46.2%，貯蔵具 21.7%，供膳具 32.1%
串山ミルメ浦遺跡	煮沸具 57.3%，貯蔵具 13.3%，供膳具 19.4%
原の辻遺跡・大川地区	煮沸具 4.2%，貯蔵具 15.7%，供膳具 80.1%
大宰府史跡	煮沸具 11.1%，貯蔵具 9.1%，供膳具 79.8%

煮沸具は，土師器の甕・甑・カマド，貯蔵具は，須恵器の壺・甕，供膳具は，土師器と須恵器の杯類（蓋含む）としてカウントした。稗田原遺跡の場合，総数 660 点（煮沸具 305 点，貯蔵具 143 点，供膳具 212 点）で上記のような結果となった。

結果を各データと比較してみると，煮沸具の割合の高さで串山ミルメ浦遺跡に近いことが判明した。供膳具は，串山ミルメ浦遺跡ほど低くはないが，それでも大宰府史跡や原の辻・大川地区に比べると大きな開きがある。串山ミルメ浦遺跡は，海岸に位置し，水産加工などを行っていたと考えられているのに対し，大宰府は言うまでもなく，原の辻遺跡は官衙的な性格が指摘されている。したがって，本データから見る限り，生産遺跡に近い遺物組成を示しているといえよう。もちろん，後述のように，越州窯系青磁が出土しているなど，単純に判断できない材料もあるが，全体的な傾向として，この結果を認識してよいのではないだろうか。

【引用参考文献】
赤司善彦 1989「大宰府出土土器の検討」『九州歴史資料館研究論集 14』九州歴史資料館
川口洋平 1995「出土土器・陶磁器の組成について」『原の辻遺跡Ⅱ』石田町文化財保護協会調査報告書第２集　石田町文化財保護協会
宮崎貴夫 1990「出土土器の組成について」『串山ミルメ浦遺跡』勝本町文化財調査報告書第８集　勝本町教育委員会

（考察２）島原半島の古代遺跡について－稗田原遺跡を中心に－

１．はじめに

今回の稗田原遺跡の調査では，旧河道を流れた土石流の堆積層から，古代を主体とする遺物が出土した。この旧河道は，平成10年度の調査でも確認されており，やはりまとまった量の古代の遺物が出土している（川口編1999)。本稿では，旧河道から出土した遺物と，島原半島の他の古代遺跡との比較を通して，当該期の様相について考えてみたい。

２．島原半島における古代遺跡の調査

島原半島において，考古学的な調査の行われた遺跡としては，以下をあげることができる。

①大園遺跡（北高来郡吾妻町）

②五万長者遺跡（北高来郡国見町）

③大野原七反畑遺跡（北高来郡有明町）

④松尾遺跡（北高来郡有明町）

⑤稗田原遺跡（島原市稗田町）

①は，島原半島の付け根にある遺跡で，須恵器や土師器がまとまって出土している。土師器の杯には文字が刻書されたものもある（安楽1991)。②は，古くから古瓦が採集されており，老司系古瓦との指摘がなされていた（小田1958ほか)。礎石が存在していたともいわれ，高来郡寺の可能性が指摘されている（本馬1996)。最近の調査では，版築や祭祀遺構が確認され，須恵器や土師器も出土している（川道編1997)。③は，廃棄土坑から，須恵器・土師器が集中して出土している。遺物の中には文字が刻書されたものもある。隣接する大野原一丁田遺跡からも刻書土器が採集されている（諫見1993)。④は，土師器・須恵器がまとまって出土している。量的にみると土師器の甕が主体となっているが，杯には刻書が認められるものもある。⑤は，平成５年に行われた調査で，古代の刻書土器が出土したのに続いて，平成10年の調査で，刻書のある土師器・須恵器が出土している。

これら島原半島の古代遺跡を概観すると，②の寺院と考えられる五万長者遺跡を除けば，ほとんどが性格不明の遺跡である。しかしながら，数は少ないものの，刻書土器が出土していることで共通している。

３．歴史地理学からみた古代の島原半島

古代の島原半島については，古文献にもとづいた歴史地理学的な研究がある。以下に概略を記す。島原半島は，肥前国の高来郡に属するが，十世紀前半に成った『延喜式』と『和名抄』記載の内容から，高来郡衙や駅家の位置，またそれらを結ぶ駅路の推定などが成されている。高来郡を構成する郷は，八世紀前半の状況を記したとされる『肥前国風土記』によれば，九郷からなるとされるが，『和名抄』の時点では，山田・新居・神代・野鳥の四郷しか記載されていない（註１)。高来郡家については，国見町の高下（こうげ）が郡家の転訛したものとして比定されている（松尾1952)。付近には，郡寺とされる前掲②の五万長者遺跡があるほか，比定地の北西には，神代条里と土黒条里が広がっている。また，木下良は，『延喜式』記載の高来郡の駅を次のように比定している。船越（諫早市船越名)，山

田（吾妻町山田），野鳥（島原市島原）。駅間を結ぶルートとしては，山間地の尾根や雲仙の中腹を通る経路が想定されている（木下 1979）。

4．稗田原遺跡の出土遺物

稗田原遺跡の旧河道から出土した遺物の中で，注目されるものとして，刻書土器と越州窯系青磁をあげることができる。これらは共に，官衙的な性格を示す遺物であるが，刻書土器が他の島原半島の遺跡からも出土しているのに対し，越州窯系青磁の出土は初めてである。越州窯系青磁は，白磁Ⅰ類（註２），長沙窯系磁器と共に初期貿易陶磁とよばれ，主に九世紀代に輸入されたが，その分布は，官衙や寺院など有力者が介在した場所に集中する傾向がある。

一方，同じ旧河道出土の遺物の中には，土師器の甕が多量に含まれており，食物などを組織的に生産・加工していたことが推測される。このような状況は，他の長崎県域の古代遺跡では，主に海岸部の遺跡に多くみられる。例えば，壱岐・勝本町の串山ミルメ浦遺跡では，土師器の甕が大量に出土しており，海岸部に位置することから，水産加工の場として機能していたことが推測されている（安楽 1989）。稗田原遺跡の場合，海岸部に位置してはいないが，やはり何らかの食物生産・加工に関連していたのではないだろうか。

5．小結

稗田原遺跡では，以上のように官衙的な性格の遺物と生産加工に関わる遺物が出土している。このことは，何を意味しているのだろうか。例えば，律令下の税制として調の貢納があげられるが，この調の貢納に関しては，公的権力の組織的な関与が考えられる。生産地に，このような公的な拠点が存在したかどうかは，現段階では不明であるが，可能性として指摘しておきたい。

また，先にあげた歴史地理学的研究と，稗田原遺跡との実証的比較であるが，これも現段階では，情報に乏しい。木下が島原市にあてている「野鳥駅」との関連も，積極的に支持できる材料に乏しい。むしろ，筆者には文字資料の豊富な有明町周辺の諸遺跡との関連を指摘しておきたい。この地域が古代において，ある程度の生産基盤を有しており，公的な権力との関わりを持っていたことは，資料からみる限り明らかである。今後，歴史地理学との連携を深め，より具体的に研究を深めていく必要があろう。

註１　高来郡の郷数の減少について竹内理三は，『和名抄』において省略されたものと推測し，『延喜式』ほかの文献から高来郷，大野郷，有馬郷，串山郷，土歯郷を補っている（竹内 1980）。
註２　白磁Ⅰ類は，隣接する畑中遺跡からの出土が報告されている（宮崎 1998）。

【引用参考文献】
安楽勉編 1989『串山ミルメ浦遺跡』勝本町文化財調査報告書第７集　勝本町教育委員会
諫見富士郎 1993『大野原七反畑遺跡』有明町文化財報告書第 10 集　有明町教育委員会
小田富士雄 1958「九州に於ける大宰府系古瓦の展開（３）」『九州考古学』５・６　九州考古学会
川口洋平編 1999『稗田原遺跡Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第 152 集　長崎県教育委員会
川道寛 1997「五万長者屋敷跡」『県内重要遺跡範囲確認調査報告Ⅴ』長崎県文化財調査報告書第 133 集　長崎県教育委員会
木下良 1979「肥前国」『古代日本の交通路Ⅳ』大明堂
木本雅康 1998「高来郡家と松浦郡家」『原始・古代の長崎県　通史編』　長崎県教育委員会
竹内理三 1980「国郡制の郷と駅」『長崎県史　古代・中世編』　吉川弘文館
本馬貞夫 1996「五万長者屋敷跡」『図説長崎県の歴史』河出書房新社
松尾貞明 1952「先史時代より平安時代に至るまでの多比良」『多比良町郷土誌』

Ⅳ　まとめ

今回の稗田原遺跡の調査で判明したことを，概略的にまとめると以下のようになる。

①縄文時代（中期末から後期か）の遺物包含層が確認された。

②土石流により埋没したと考えられる旧河道が，確認された。

①についてであるが，遺跡の南端の極めて限られた地点で確認された。本文でも記したが，付近は河川流により浸食を受けたと推測され，微高地であった出土地点周辺において，包含層がかろうじて残存していたものと考えられる。遺物の時期については，中期末あるいは後期初頭のどちらなのか，現段階での研究では微妙ということである（註１）。今後の研究の進展に期待したい。

②については，平成10年に実施した調査で確認された，旧河道の延長部に相当する（川口編 1997）。旧河道は，土石流によって埋没したと考えられるが，土石流内からは古代を主体とする遺物が出土している。これらの遺物は，もともと調査区付近にあったものではなく，さらに上流から流されてきたものと考えられる。土石流の時期であるが，旧河道出土の遺物のうち，最も新しいもので同安窯系青磁と考えられる青磁片が含まれるため，12世紀後半頃とも考えられるが，わずか１点で小片であり，混入の可能性も考えると即断は避けたい。

また，今回も中世の遺物として，東播系の須恵器が出土している。平成10年の調査では，他に瀬戸，常滑，備前などの広域流通陶器が出土しており，中世期には付近に生活が営まれていたと推測される。さらに，近世初頭の遺物として，唐津系の灯明皿が出土している。平成10年の調査では，産地を保留し，他の出土遺物と年代的な開きがあるとしていたが，この時期にも付近で生活が営まれていたのであろう。

以上，今回の稗田原遺跡の調査を総括してみた。調査面積は狭いながら，前回までの調査結果と合わせて考えると，予想以上の成果があったと思われる。本遺跡は，時期幅が縄文時代から近世までとと広く，しかも場所によって主体となる時期が異なるという複雑な遺跡である。今回は，縄文時代と古代が中心であったが，過去の調査では，古墳時代初頭の住居跡も確認されている（村川編 1997）。その理由としては，雲仙岳の火山活動や土石流などの災害が関係していることが，明らかになってきた。今後の調査で，遺跡の全容が明らかにされることを期待したい。

註１　縄文土器の時期に関しては，古門雅高・渡邊康行の両氏に多くを御教示いただいた。感謝申しあげたい。

【引用参考文献】

川口洋平編 1999『稗田原遺跡Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第152集　長崎県教育委員会

村川逸朗編 1997『稗田原遺跡Ⅰ』長崎県文化財調査報告書第136集　長崎県教育委員会

図　　版

図版１

調査遠景

図版２

調査風景１

調査風景２

調査風景３

図版３

旧河道１

旧河道２

旧河道３

図版４

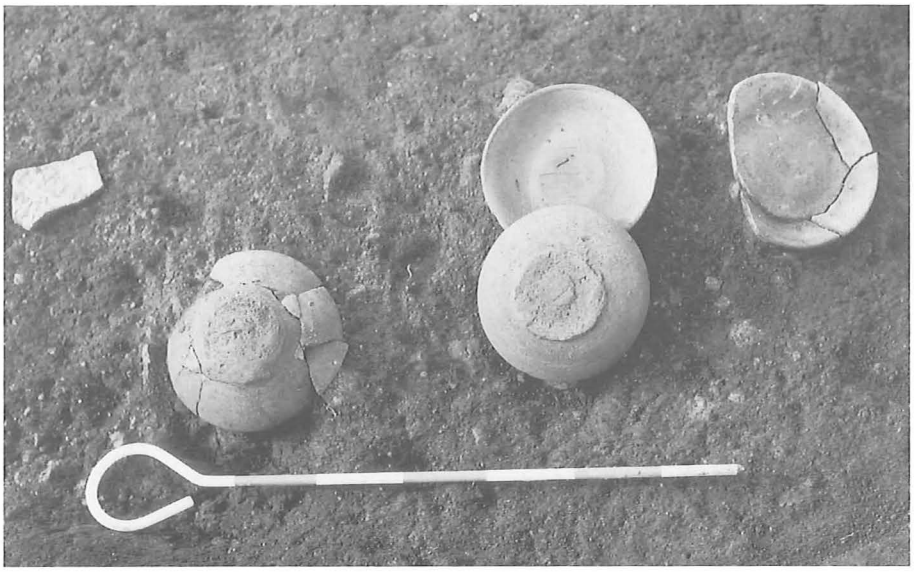
22区

22区東壁（1）

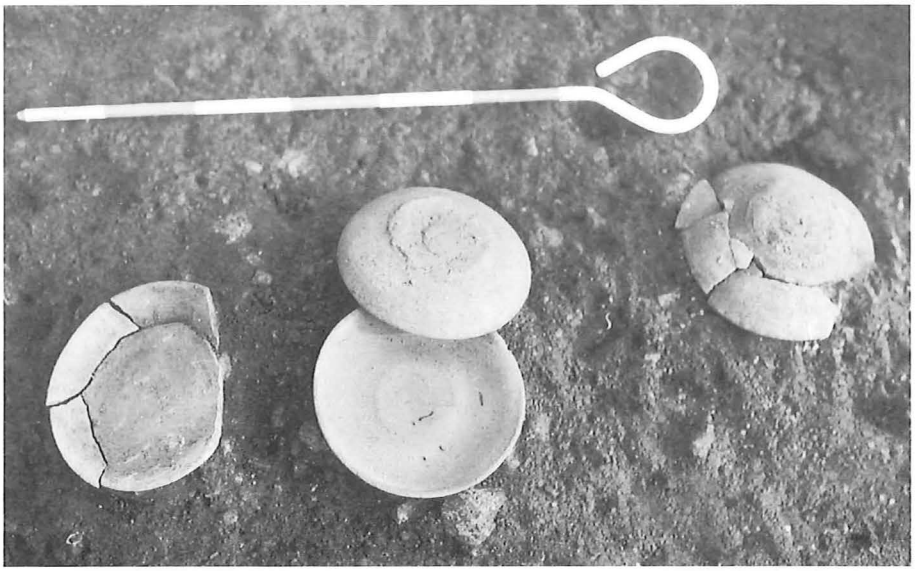
22区東壁（2）

図版５

21区旧河道土層



旧河道
土師器出土状況



旧河道
土師器出土状況

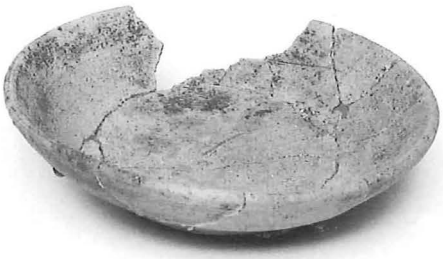
図版６

22区縄文土器の
出土状況

土師器9

土師器10

土師器11

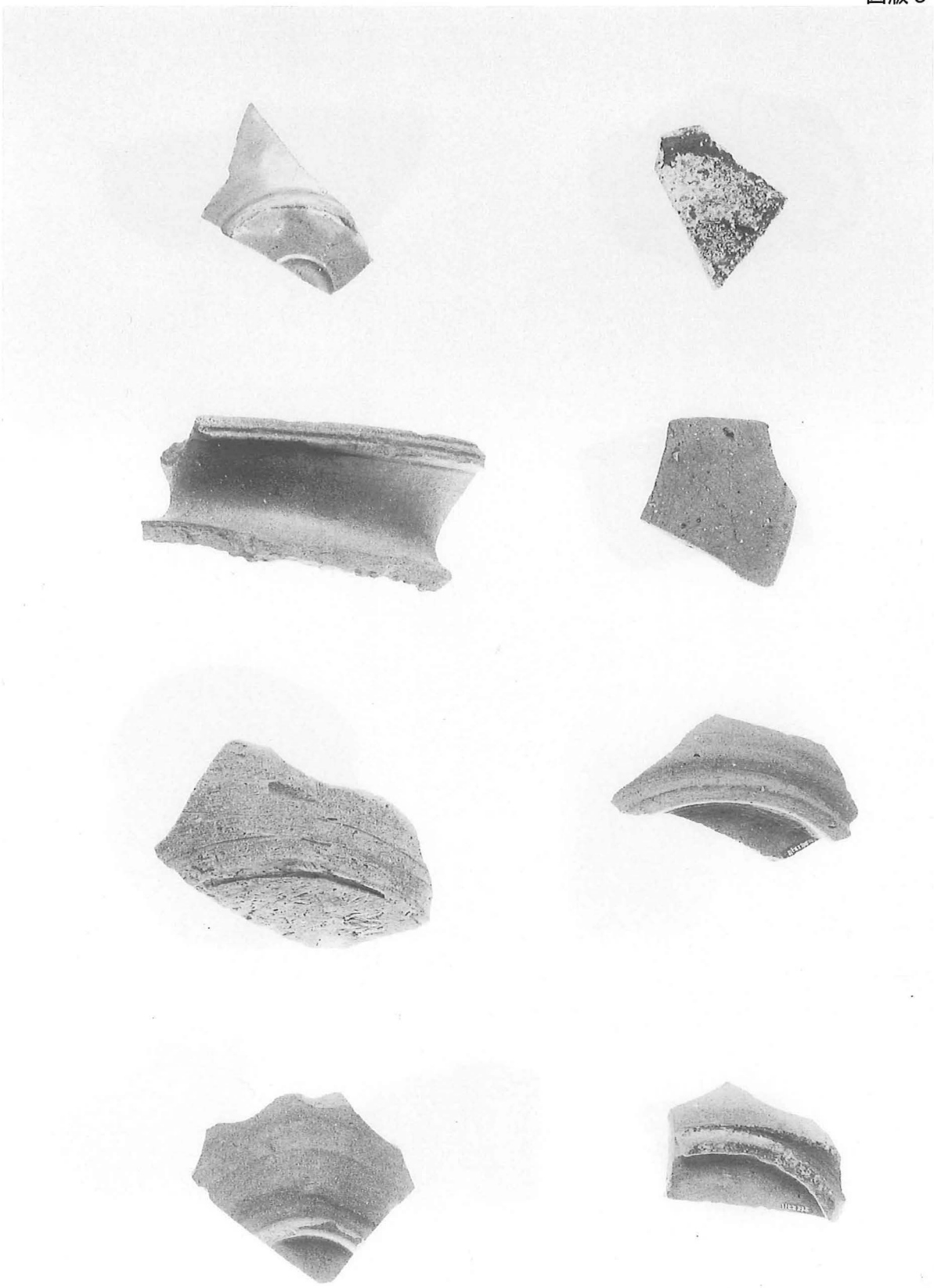


土師器12

灯明皿22

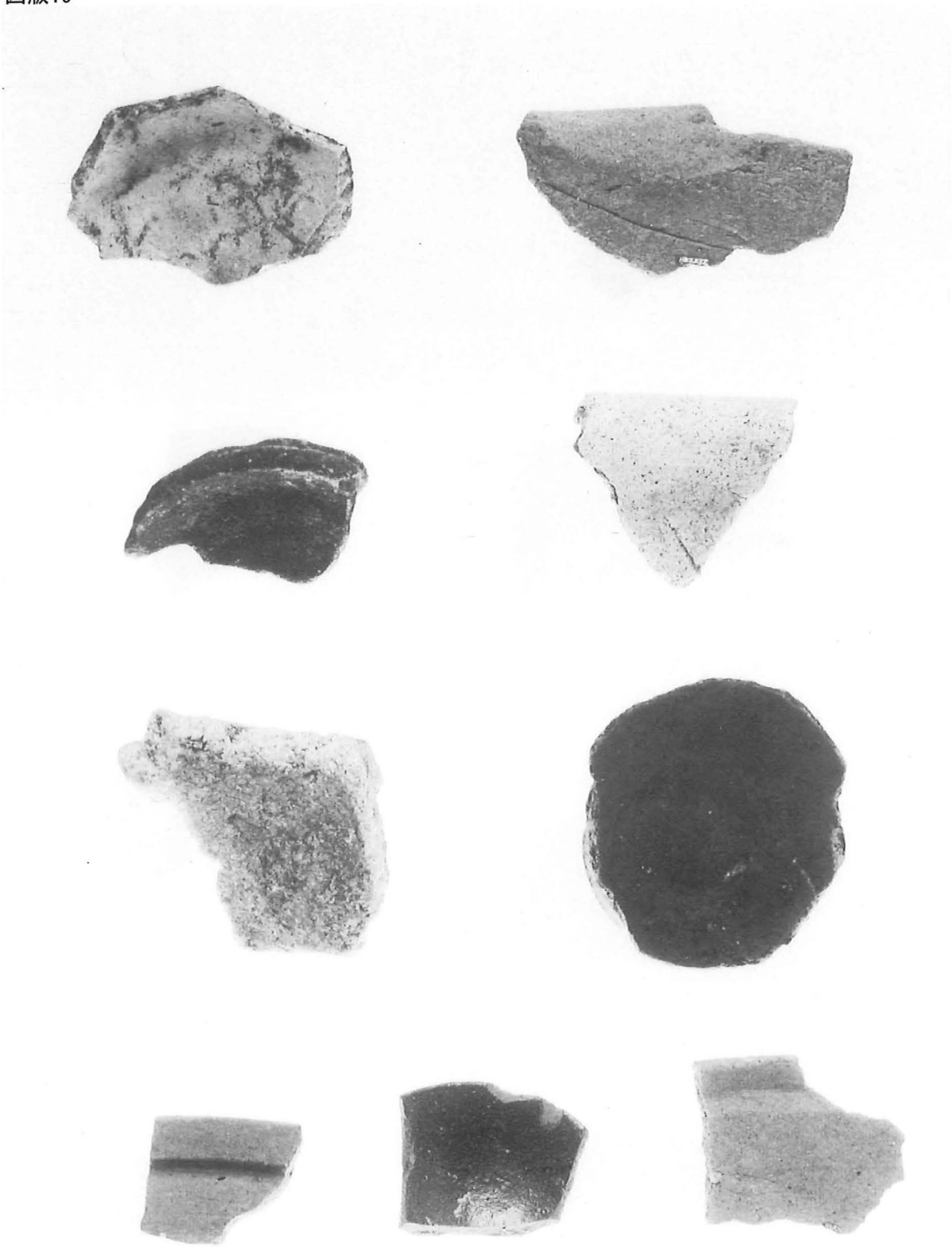
図版８

歴史時代の遺物①（内）

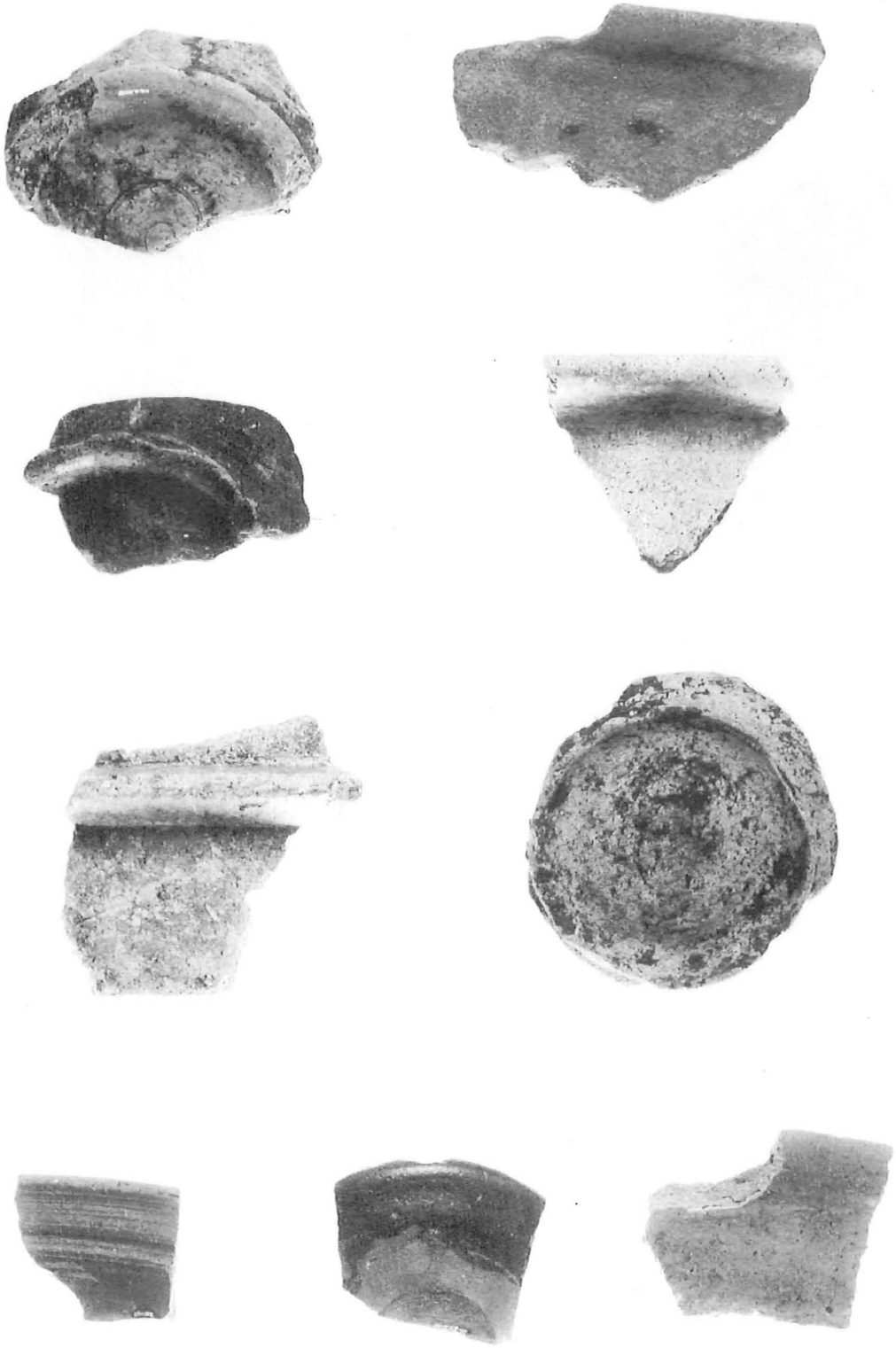


歴史時代の遺物①（外）

図版10

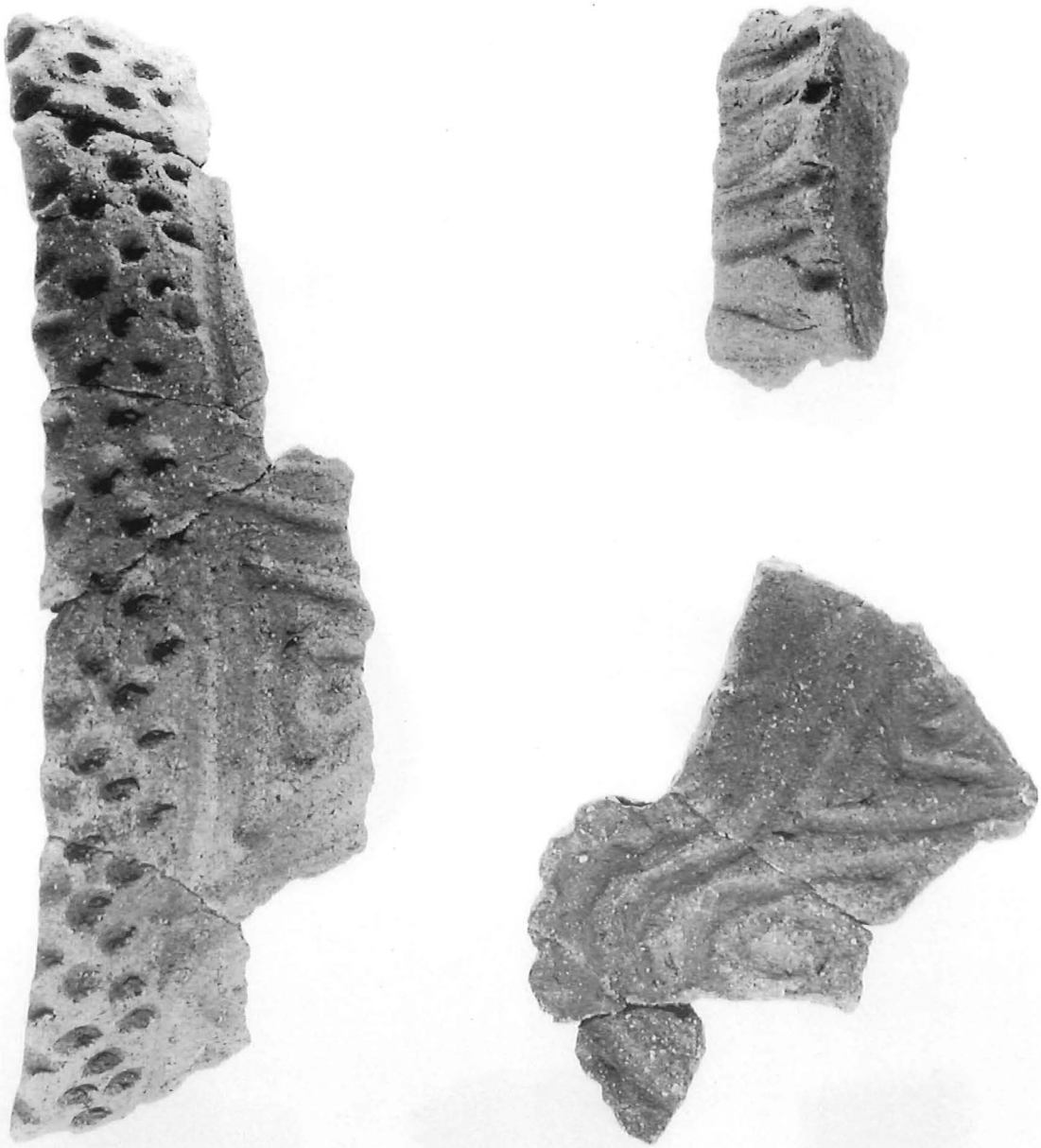


歴史時代の遺物②（内）



歴史時代の遺物②（外）

図版12



縄文土器

報告書抄録

ふりがな	ひえだばるいせき
書名	稗田原遺跡
副書名	
巻次	Ⅳ
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書
シリーズ番号	第157集
編著者名	川口　洋平
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒850-8570　長崎市江戸町２－13
発行年月日	西暦　2000年　3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひえだばるいせき 稗田原遺跡	ながさきけんしまばらしひえだまち 長崎県島原市稗田町	03	92－74	32° 48′ 24″	130° 21′ 10″	1998711 ｜ 1998714 1999220 ｜ 1999309	12㎡ 220㎡	県道拡幅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
稗田原遺跡	遺物包含地	縄文 古代		縄文土器 須恵器 土師器	

長崎県文化財調査報告書　第157集

稗田原遺跡Ⅳ

平成12年3月31日

発　　行　長崎県教育委員会

長崎市江戸町2-13

印　　刷　平和堂オフセット印刷㈲

長崎市出島町5番11号